日本行動計量学会会報
第24号
1981年10月19日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

行動計量学と多変量時系列解析

脇本和昌

行動計量学に、数量化をはじめとする多変量解析の手法が非常によく使用されるのは周知の事実である。その理由は、行動科学において生ずる問題が、主として多くの変量をもつ測定値の構造の解明を要求することによるものと考えられる。たとえば、日本の都道府県の平均寿命一つとってみても、その長短は、気温、食べ物、地理的条件、文化水準、医療状態といった多くの変量が複雑な形でかかわりを持っていて、その因果関係の解明はなかなか一筋縄ではいかない。

私が最近手がけている問題の中に、二つほど行動計量学と密接な関係をもつものがある。その一つは、小学生、中学生などにおける体力低下や、非行などに関する調査であり、約八千人のランダムサンプルによってその要因と考えられる項目をすべて盛り込んだ調査をおこない、多変量解析を駆使して分析してみたが、一度だけの調査ではあまり思わしい結果は得られなかった。

他の一つは、十八歳以上一万人に近いランダムサンプルにより、通勤、レジャー、買い物など生活行動圏に関する調査で、回答結果より、その行動パターンを推測するものである。たとえば、買い物圏一つとり上げても、それがどんな要因によって定まるのか、これまた一回だけの調査結果からだけではなかなか結論が出せない。

一般的に、行動科学に関する問題解決は、上手な計量をおこない、強力な武器である多変量解析の手法を使用しても、一回だけの調査結果からだけでは、原因となる多くの変量と結果の間の因果関係の把握がむずかしい場合が多い。なぜなら、因果関係を示す多変量データは、多次元空間の点として分布し、それが時間とともに変化しているために、多くの点の分布の特徴的な「形」を時系列的に認識することに欠けるからである。

時系列的に多次元空間の点の形を認識するためには、調査そのものをくり返しおこなうことと、現在の多変量解析の手法に時間を導入し、時系列的観点から見直すことが必要である。したがって、行動科学における多くの未解決の因果関係を解明するためには、目的に合った時系列調査データを得ることと、多変量時系列解析の手法の開発が大きな鍵を握っている。現在でもこのような観点から問題解決に取り組んでおられるかたを見受けるが、規則的に時系列調査データを得ることは大変な労力と時間を要し、問題解決のためには想像以上の努力と忍耐を必要とする。しかし、これは行動計量学に携わる者の宿命であるように思われる。

今後も同じテーマを多変量解析の立場から、ねばり強く長期にわたって調査分析することによって新しい結果を求め続けて行きたいものである。

（日本行動計量学会理事、岡山大学教養部教授）

〝〝〝学会費納入のお願い！

五十六年度会費（正会員四千円、準会費二千五百円）を未納の方は大至急、ご納入ください。五十五年度以前を滞納している方は、もちろんです。「滞納」は、学会の存続に響きます。ご協力を！

送金は振替（振替番号、東京八－一四八〇五六、日本行動計量学会）をご利用ください。

第九回大会報告

実行委員長　内田良男

今大会は一桁最後の第九回にあたり、一九八一年九月三日(木)から三日間名古屋大学教養部新館で行われました。そもそも大会のお話をいただいたのは第八回大会の折でした。お引受けするまでに少々時間を頂戴しました。

実行委員は、学内から石水照雄(文)、井上俊(医)、潮木守一(教)織田守矢(工)の諸先生、学外から石井直宏(名工大工)、岩脇三良(兵庫教育大学、学校教育)浦本勲(愛知県コロニー)、大谷元彦(名古屋保健衛生大医)、室伏靖子(京大霊長研)、森孝行(中京大文)の諸先生でした。名大の内外・専門の異る方々から企画や運営等について貴重な御意見をいただきました。

具体化の仕事となると随分と配慮すべきことが多いということを嫌というほど味わいました。それらを事務局の方々が懸命にこなしてくれました。大会はどうにか無難に終えることができました。これは偏に学会員皆様のお力添えと感謝しています。以下に村上隆会員に代表として事務局報告をしてもらいます。(名古屋大教育学部)

…大会事務局報告…

前記メンバーの実行委員会の下に今回は、後藤宗理、千野直仁、藤田英典、牧野義隆、増井透、村上隆が事務局を構成して作業にあたりました。また阪市大の辻本英夫氏にも協力してもらいました。第七回の生沢先生、第八回の福川先生の、それぞれ詳細な大会記録がありましたので、さほど迷うことなく進めることができました。

今年の一般テーマの発表件数は六七で、A～Kの一三のセッションを設定しました。これに特別テーマ「日本　西と東」の発表を加えると七二件となり、今年もまた記録を更新しました。こうして三会場同時進行という形式がほぼ固定化してきましたが、学際性を旗印とする本学会で会場数を増すことは趣旨に反することと思います。しかし、現在の発表時間(これも行動計量シンポジウム以来の伝統でにわかには変更し難いものと思いますが)では、これもやむをえませんでした。

さて、あまり魅力的とは言えない名古屋の地にいったいどれだけの会員がおいでいただけるか大変心配致しました。しかしフタをあけてみますと、参加者数は二三一名と地方大会としてはこれまでの最高でした。これには一同ホッとするとともに、この学会への関心が確実に定着しつつあることに大いに意を強くしたものです。参加者の内訳は正会員一八一名、準会員二三名、非会員二四名、パネルディスカッションの招待者三名となっております。

当日の運営は、なにぶんにも若い不慣れな事務局員が主体でありましたので、いろいろ行き届かぬ点が多かったかと思います。また大会前日あたりから有名な名古屋の暑さがぶり返し、また大会2日目には台風接近といったこともあり天候にはたたられっぱなしでした。しかし各会場ともなかなかの盛況で、熱のこもった研究発表や討論が行われました。それからこれは地方学会ならではのことでしょうが、特別テーマの研究発表の一部がテレビで放映されたこともご報告しておきましょう。

微力な私達がともかくも無事に大会を終えることができましたのは、学会内外の多くの方々のお力によるものです。お一人ずつお名前を記してお礼申し上げたいのですが、限られたスペースでは不可能です。皆様どうもありがとうございました。(大会事務局・村上隆・名古屋大教育学部)

第九回大会発表論文抄録集の購入を希望する方へ…

第九回大会(名古屋大)の論文抄録集に残部がありますので、ご希望の方に有料でおわけします。過去の論文抄録集にも残部があります。送料を含む代金は、左のとおりです。送金は振替(1ページ左下参照)でどうぞ。通信欄に「第○回抄録集購入希望」と明記すること。第三回は残部なし。

第一回(統数研)	一千円
第二回(統数研)	一千五百円
第四回(東京大)	二千円
第五回(岡山大)	二千円
第六回(立教大)	二千八百円
第七回(大阪市大)	二千八百円
第八回(慶応大)	三千三百円
第九回(名古屋大)	三千五百円

いずれも送料を含む単価です。

会議議事録

◇理事会（七月六日）
於　統計数理研究所
出席者　理事　九名

1. 『第一回医学・生物学に関する情報学連合大会』（発起人代表・大島正光）よりの共催依頼を受諾、本学会からの組織委員として林知己夫氏を推薦した。
2. 五十五年度決算に関する事務局の報告を了承し、監査を受けて第九回の総会に提出する。
3. 学会事務の改善のため、主要な業務を外部機関に委託する案について審議し、原則として同案を採択することとした。所要経費など関連事項を、なお詳細に検討し、総会前の次回理事会で最終的な案を作成し、予算化を図るものとする。
4. 学会費長期滞納の一掃を図るため、最終的な督促を行う。
5. 第九回大会準備状況、各種委員会（運営、編集）報告。

◇理事会（八月三十一日）
於　統計数理研究所
出席者　理事　九名

1. 学会事務の外部委託の件について事務局より検討結果と計画案の説明があり、これを承認。委託経費を含む五十六年度予算案を総会にはかることとした。
2. 外部委託などによる五十七年度以降の支出増に備えて、五十七年度からの学会費値上げ（千円増）を会則11条の改訂議案として総会に提出する。また、会則2条の所在地表示に関し、暫定的な案として「当分の間」を加えることを提案する。
4. 学会費の長期滞納者の正会員四四名と準会員一一名を八月三十一日付で除籍した。

◇第九回大会総会（九月三日）
於　名古屋大学教養部
［挨拶］開催校（名大丸井教育学部長代理・大橋正夫教授）、学会（林知己夫理事長）
［報告および議事］（議長・森孝行大会実行委員）

1. 昭和五十五年度事業報告、同決算報告（林理事長ほか各担当理事および編集幹事）
2. 会計監査報告（安田監事）
3. 昭和五十六年度事業計画・同予算案（原案どおり承認）
4. 会則2条・11条の改訂（原案どおり可決）
5. 次期・推薦理事（会則7条による）十五名（承認）

［実行委挨拶］（内田良男委員長）

≪関連記事4・5・6ページ≫

〃〃〃〃〃〃 新しい理事の役割分担

◇理事会（九月三日）
於　名古屋大学教育学部
出席者　理事十二名（他に委任状提出十六名）

1. 投票により、前理事長林知己夫氏を引続き理事長に選出。
2. 理事の会務分担を、原則として前期の分担を継承することとして、つぎのように決定した。
［編集］肥田野直（委員長）、池田央（和文誌担当）、松原望、丸山久美子（欧文誌担当）
［運営］飽戸弘、駒澤勉
［総会］野元菊雄
［刊行物企画］山本俊一
［研究事業］古川俊之、池田央
［組織］脇本和昌、柳井晴夫
［関西］丘本正、生澤雅夫、安田三郎
［庶務］岩坪秀一、水野欽司

なお、庶務の水野理事が不在期間中の統数研に関わる事務は、駒澤理事が代行する。

3. 学会創立10年を迎えるのを機会に、新しい活動・運営形態を確立するため、会則の全面改訂を含む学会運営の見直しを図ることとし、組織担当の脇本・柳井両理事を中心に検討する。
4. 編集運営など各種委員の委嘱は、担当理事を中心に候補者を選び、早期のスタートを期して次回の理事会で決める。

「第一回医学・生物学に関する情報学連合大会」の共催

本学会は標記の会議を共催いたします。同会議の開催予定はつぎのとおり。詳細は大会事務局へ。

［英字名］First Joint Conference on Informatics in Medicine and Biology
［会期］昭和五十六年十二月十一日（金）―十三日（土）
［会場］砂防会館、日本都市センター、（東京）
［参加費］八千円（論文集三千円を含みます）
［連絡先］（一〇七）東京都港区赤坂2―3―4、ランディック赤坂ビル、財・医療情報システム開発センター、大会事務局。
（電・〇三―五八六―六三二一）

昭和五十五年度決算と五十六年度予算について

先の第九回大会（名古屋大学）で昨年度の決算（5ページ）と本年度予算（4ページ）が承認されましたので報告いたします。

昨年度は、会費の積極的徴収や経費節減努力により約二四五万円（未刊の和文誌8巻2号の予想価八五万円を含む）を本年度に繰越すことができました。会員諸氏のご協力のおかげです。また、会計監査では、監事の宮原守男（虎の門法律事務所）、安田三郎（関学大・社会）の両氏にお世話になりました。お礼申しあげます。

本年度の予算は、日常事務の多くを外部委託するという、思い切った予算です。これについては他の場所（6ページ）で説明しお願いいたしますが、本学会の運営を無理なく機能的に進めるための基礎固めに一度は試みなければならない改革として、総会の承認をいただいた予算です。会員諸氏の一層のご支援をお願いする次第です。

（事務局・水野）

昭和56年度　会計予算

収入	56年度予算案	55年度実績
前年度繰越金	2,446,107円	1,350,663円
学術定期刊行物補助金（注1）	770,000	770,000
56年度学会費	3,870,000	3,889,000
正会員　650人×4,000円	2,600,000	2,604,000
準会員　100人×2,500円	250,000	265,000
賛助会員　34口	1,020,000	1,020,000
他年度学会費	450,000	961,800
学会誌売上金	400,000	403,170
預金利子	100,000	86,394
計	8,036,107円	

支出	56年度予算案	55年度実績
学会誌製作費	5,132,700円	4,212,346円
和文誌8巻2号（注2）	850,000	7巻2号
〃　9巻1号	850,000	8巻1号
〃　9巻2号	850,000	1,746,900
欧文誌 No.10	1,291,350	No. 8.9
〃　No.11	1,291,350	2,465,446
月例会費用	60,000	58,734
各種委員会活動	200,000	116,400
学会事務委託費	1,211,000	
新原簿作成費	661,000	
経常経費	550,000	
人件費	150,000	61,800
印刷費	250,000	206,700
通信費	700,000	468,220
消耗品費	50,000	19,256
交通費	10,000	2,500
会合費	100,000	63,700
雑費	10,000	1,175
選挙費用	128,620	
予備費	33,787	0
計	8,036,107円	

（注1）　内定額　　（注2）　55年度未発行分

昭和55年度　会計決算報告（自昭和55年4月1日～至昭和56年3月31日）

収　　入	決　算	予　算	増　減
前年度繰越金	1,350,663円	1,350,663円	0円
学術定期刊行物補助金	770,000	770,000	0
55年度学会費	3,889,000	3,950,000	△ 61,000
（正会員　651人×4,000円）	（2,604,000）	（2,600,000）	（4,000）
（準会員　106人×2,500円）	（265,000）	（300,000）	（△ 35,000）
（賛助会員　34口）	（1,020,000）	（1,050,000）	（△ 30,000）
他年度学会費	961,800	500,000	461,800
学会誌売上金	403,170	280,000	123,170
大会・講習会決算残高	77,911		77,911
抄録集等収入	118,000		118,000
預金利子	86,394	10,000	76,394
計	7,656,938円	6,860,663円	796,275円

支　　出	決　算	予　算	増　減
学会誌製作費	4,212,346円	4,940,000円	△727,654円
（和文誌7巻2号（注1））	（856,040）	（800,000）	（56,040）
（〃　8巻1号）	（890,860）	（800,000）	（90,860）
（〃　8巻2号）	（0）	（800,000）	（△800,000）
（欧文誌 №8）	（1,196,646）	（1,270,000）	（△ 73,354）
（〃　№9）	（1,268,800）	（1,270,000）	（△ 1,200）
月例会費用	58,734	150,000	△ 91,266
各種委員会活動	116,400	200,000	△ 83,600
人件費	61,800	100,000	△ 38,200
印刷費	206,700	250,000	△ 43,300
通信費	468,220	700,000	△231,780
消耗品費	19,256	30,000	△ 10,744
交通費	2,500	10,000	△ 7,500
会合費	63,700	150,000	△ 86,300
雑費	1,175	30,000	△ 28,825
予備費	0	300,663	△300,663
次年度繰越金	2,446,107		
計	7,656,938円	6,860,663円	796,275円

（注1）　54年度未発行の分

予告

◎◎◎◎　学会事務（会員向）の一部が近く変更　◎◎◎◎◎◎◎◎

――詳細は、次号の会報でお知らせします――

本学会では、来年早々、事務の一部を財団法人・学会事務センターに委託する準備を進めています。会員諸氏の理解と協力をいただきたく、ここに予告いたします。

この変更の理由は、現状の手内職的事務では、もはや学会の進度に追従できないとみたことによります。委託の内容は次の4点です。

①学会費の徴収業務（催促を含む）
②住所・勤務先等の異動処理
③入会・退会事務（受付・除外）
④大量郵便物の発送（全会員向）

新方式が発足すると、会員名簿や会費台帳がコンピュータに漢字入力され、会費請求や学会誌は、センターから会員にセンター用の封筒で送られます。また、入・退会の申込や住所・勤務先の変更は所定の様式でセンターに連絡します。名簿印刷が容易など多くの長所がある反面、従来の〝頼りない〟が融通のきく〝事務が少々クールな内容に変わるのは否めません。誤解のないようにお願いしますが、事務の全部がセンターに移るのではありません。たとえば、学会誌の論文投稿、バックナンバー購入等は別扱いになります。多元化する事務窓口の詳細については、次号の会報で説明し、その時点を境界にして新方式に切替えます。それまでは従来どおりです。

今、移行準備中ですので、最近異動のあった方は至急「現住所・電話、所属名・所属住所・電話」をセットで、現事務局あてご連絡ください。また、会費未納の方は大至急払込みください。

今期・理事会がスタート
新理事長に林知己夫氏再選

第九回大会で、今期の理事会が正式に発足しました。本年六月の役員選挙で選出された理事（十七名）・監事（二名）と会則7条による推薦理事（十五名）で構成されます。任期は2年です。林知己夫氏が理事長に再選されました。

［理事長］林知己夫（統数研）
［理事］鮑戸弘（東大新聞研）、浅野長一郎（九大理）、○阿部裕（阪大医）、生澤雅夫（大阪市大文）、池田央（東工大教育工学開発センター）、岩坪秀一（大学入試センター）、印東太郎（カリホルニア大）、○大島正光（医療情報システム開発センター）、丘本正（阪大基礎工）、奥野忠一（東大工）、○河口至商（北大工）、○木下冨雄（京大教養）、○木村栄一（日医大医）、○京極純一（東大法）、○駒澤勉（統数研）、芝祐順（東大教）、竹内啓（東大経）、○戸田正直（北大文）、野元菊雄（国語研）、○早川武夫（専修大法）、肥田野直（大学入試センター）、○藤田廣一（慶大理工）、古川俊之（東大医）、○松原望（筑波大社工）、○丸山久美子（青学大文）、水野欽司（統数研）、○三隅二不二（阪大人間科学）、○安田三郎（関学大社会）、柳井晴夫（千葉大人文）、○山本俊一（東大医）、脇本和昌（岡山大教養）

∧○印は推薦理事∨

［監事］開原成允（東大医）、宮原守男（虎の門法律事務所）

会則の変更

来年度から会費の値上げ
（正）五千円　（準）三千五百円

第九回の総会で、会則の一部が変更されました。このうち、大きな変更は来年度（五十七年度）からの学会費の値上げ（会則11条）です。正会員は五千円、準会員は三千五百円と、それぞれ千円のアップになります。諸経費の増加、学会事務の機能向上などに備えるためのもので、会員諸氏のご理解、ご協力をお願いします。

なお、値上げは来年度からのもので、本年度（五十六年度）は従来どおりです。誤解のないようにしてください。賛助会員については変更がありません。

改訂された会則2条は五十六年九月三日から、会則11条は五十七年四月一日から施行されます。

(新)「2. 本会の事務局は、当分の間、統計数理研究所に置く。」
(新)「11 会費として正会員は年額五千円、準会員は三千五百円を、その年度の会費として、毎年4月末日までに納めなければならない。」

第十回大会は、〃国語研〃（東京）で開催

会期は八月二十五日～二十八日の四日間

昭和五十七年度の第十回大会は国立国語研究所と統計数理研究所の共催で実施することに、このほど決まりました。会期は、昭和五十七年八月二十五日（水）から二十八日（土）までの四日間で、主会場は国立国語研究所と、決定しております。

実行委員長は野元菊雄氏（国語研）副委員長は鈴木達三氏（統数研）で、現在実行委員会を中心に大会プログラムの具体案を検討中です。

大会の詳細は後日全会員に通知されますが、この大会は本学会〃満十歳〃の記念大会に当たりますので、大会を盛り上げるために、ふるって研究発表の申込みをしてくださるようお願いいたします。

なお、大会会期を例年と異なり八月下旬に四日間と定めたことについての実行委員会の意向は左記の通りです。

会期を四日間としたのは、第十回大会を記念して、会期中にしかるべき形式で一般公開行事を実施することを考えているからです。また開催時期を八月下旬としたのは、例年通りの九月上旬ですと、来年東京で開かれる「第十三回国際言語学者会議」と重なることを避けたからです。主催機関側の都合を会員の皆様に押しつける形になる点を心苦しく思っていますが、何卒よろしく御理解いただきたいということです。その代わりといってはなんですが、この機会に国語研究所の仕事ぶりを見ていただきたい、というのも実行委員会の意向でもあります。

追記、第十一回大会は昭和五十八年に京都大学で開催されることが、はやばやと予定されています。

第十回大会に関する御希望・御意見は、大会事務局にどしどしお寄せ下さい。

◆国立国語研究所（東京都北区西が丘三－九－十四　電話(03)九〇〇－三一一一）　事務局担当　江川清

第12回講習会の記録

昭和五十六年五月十九・二〇日　南青山会館（東京）、講師・池田央（東京工業大学）、安本美典（産業能率大学）、永松純（ADRインターナショナル）、広瀬弘忠（東京女子大学）、増山英太郎（東京都立大学）の5氏、受講者51名。

これまでの〃講習会〃

前号（第23号）では、本学会創立以降の「月例シンポジウム」の総合テーマをまとめてみました。

今回は、当学会が会員内外にサービスとして、これまで実施してきた過去十二回にわたる「講習会」の題目と受講者数とをリストアップしてみました。

全十二回中、半数近くの五回が多数量解析で、行動計量学イコール多変量解析といった観がします。

第一回・多変量解析法、昭和四十九年五月九～十一日、参加者七十三名。

第二回・人工知能と行動計量学、昭和四十九年十一月二十八～三十日、参加者二十八名。

第三回・社会調査――データ収集に関する方法論、昭和五十年五月二十九日～三十日、参加者五十二名。

第四回・調査法――具体例を中心として、昭和五十一年五月二十七～二十九日、参加者三十九名。

第五回・多変量解析の理論と応用、昭和五十一年六月二～四日、参加者百一名。

第六回・多次元尺度構成法の理論と応用、昭和五十二年六月、参加者七十名。

第七回・多変量解析の理論と応用、昭和五十二年六月一～三日、参加者六十八名。

第八回・多次元データの分類技法、昭和五十三年六月八～九日、参加者五十六名。

第九回・医学生のための行動計量学、昭和五十三年十二月二十二～二十四日、参加者二十七名

第十回・多変量解析の理論と応用昭和五十四年六月二十～二十一日、参加者六十四名。

第十一回・多次元尺度構成法の理論と応用、昭和五十五年十一月五～六日、参加者四十三名。

第十二回・多変量解析の応用、昭和五十六年五月十九～二十日、参加者五十一名。

会員の声・1

組織現象と情報処理概念

太田　敏澄

情報処理という概念は、一般システム理論、サイバネティクス、あるいは認知理論などで、広く流布しているといえよう。

私の関心事である組織現象の解明においても、情報処理概念は、その理論化に極めて有用である。組織構造は、情報処理を行うための一種のプログラムとなっているのである。

組織の意思決定センター（個人であれ、部門であれ）は、情報がインプットされると、その情報にもとづいたプログラムを起動させる。問題は、この情報のインプットである。これは、無秩序になされるわけではない。すなわち、この情報を然るべき意思決定センターにインプットするためのプログラムがあることとなる。これが、意志決定センターを位置づける組織構造となっているのである。

情報処理概念によれば、組織はこのようなプログラムの集合である。この集合は、さまざまな形をとり得るわけで、そこにどのような構造を考えるかは、論理システムによる表現が可能であろう。また、この構造は、組織の情報処理能力を表現しているとも考えられ、抽象的には、一定の構造のもつ情報処理能力を予見し得ることとなる。

一方、現実的には、意志決定センターの情報処理能力、延いては組織の情報処理能力を、どのように計測すればよいのかという問題が存在する。これは、正に行動計量の問題である。

現在のところ、およそ目標地点から掛け離れたところにいるが、理論的予見と対象の観測との対比というプロセスを重視して、「怪物」といわれる組織に取り組みたいと考えている。

（日本行動計量学会会員・東京工業大学理工学研究科大学院生）

会員の声・2

「走れメロス」とウォークマン

青山　文啓

私は太宰治の「走れメロス」が嫌いだ。これを初めて読んだのは、中学の国語の教科書でだった。その時の私の感想は実にソッ気なかった。「殺されるかもしれない自分の身代わりに友人を頼んでまで、妹の婚礼に出る必要があるのか」そして婚礼の後、彼は友人のもとへと、あらゆる障碍をものともせず駈けもどるのだ。

最近では、メロスのような単細胞の行動派は流行らないようだ。街中でも電車に乗っていても、ウオークマンで武装している連中を多くみかける。何のための武装かといえば、行動を回避するためだ。あしてウォークマンに瞑想していれば、老人に席を譲らなくてもすむ。

オーストラリアの日本語研究者ネウストプニー教授の洞眼は、日本語における書きことばの位置を機能論的に考察しながら、日本で週刊誌が異常に発達したのは、通勤電車内での行動回避機能を充すためだと見抜く。

ところが今や週刊誌の役割はウォークマンによって肩代わりされつつある。太宰が真に書かなければならなかった小説の題名は「歩けメロス」だったと思われる。

（日本行動計量学会会員・筑波大学文芸言語研究科大学院生）

◎会員数（十月十五日現在）
（正）九二三人（準）一四〇人
（賛助）三〇法人

編集後記

▼九月三日から三日間、名古屋大学で開かれた第九回大会も成功裏に幕を閉じました。大会運営にいろいろの苦心があったと思われます。

▼とりわけ、大会初日の午後の特別テーマ「日本　西と東」は場を得た企画だったと感心いたしました。この話を非会員の同僚にしたところ、多くは本学会に関心を抱き、そのうちの数人が入会したいと言っています。今後もこのような魅力的な催し物が行われることが学会の発展につながるというのが実感です。

▼先日の大会に御出席の会員諸兄にはご存知の件ですが、かなりの学会事務が「学会事務センター」に移管されることになりました。この移管に伴う諸手続きその他に関しては次号で詳しくお知らせする予定です。

▼毎度のお願いで恐縮ですが、会報への投稿を待っております。

本号は8ページです